埼玉学園大学・川口短期大学　機関リポジトリ

<Note> Notes on Recent Studies on Time : A Report on the International Symposium on Time Studies

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 湯浅, 吉美 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/1185

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

時間に関する最近の研究動向
― 国際時間学シンポジウムに参加して ―

Notes on Recent Studies on Time
A Report on the International Symposium on Time Studies

湯　浅　吉　美
YUASA, Yoshimi

1．はじめに

いわゆる「命にかかわる危険な暑さ」の中、８月１日より３日間、山口大学を会場として「国際時間学シンポジウム」が開催され、筆者も発表者の一人として参加したのであるが、さまざまな視点から18本もの発表があり、実に刺激的でおもしろいものであった。しかしながら、そもそもあまり馴染みのない研究領域かと思われるので、小稿ではそれぞれの発表の概要を示しつつ、時間学そのものについて紹介しようと思う。一瞥、脳天気と見える題目が、他のいろいろな研究の基盤あるいは前提をなす、すこぶる重要なテーマだということを感じとっていただければ幸いである。

時間学といえば、むろん時間について考究するわけだが、ふつうには二つの立場が想起されるであろう。一つには哲学的な立場から、「時間とは何ぞや」というような関心の在り方で、時間なるものは存在するのか、ヒトの心や頭がつくりだした幻想に過ぎないのではないかなどといった議論をする。もう一つは物理学的な立場から、現象を記述するためのパラメータの一つとして時間を扱う。その際、時間が絶対的ではなく相対的なものであることとは、20世紀初頭以来、常識となっており、挙げ句の果てには虚数時間などという摩訶不思議な概念さえ提唱されていることも周知であろう。いずれにせよあえて申せば、時間について考えをめぐらすことは、ごく当たり前に過ぎてゆく日常の中では、いささか浮世離れした営みであるようだ[1)]。

とはいえ、時の流れを意識することは、ヒトとその他の動物とを分け隔てる、きわめて有力な要素である。とくに未来に関しては、ヒトの一手専売といってもよかろう。いかに驚くべく高度な知能をもつことがわかってはいても、チンパンジーが明日交尾することを契ったとか、１頭のメスをめぐって２頭のオスが翌朝の決闘を約束した、というような話は聞いたことがない。過去に関しては多少考える余地もあろうが、それとてもやはり経験知として学習しただけと考えるのが穏当であるに相違ない[2)]。近年ではいくつか、仲間の死を悼む（と解釈される）行動が観察された動物もあるらしいが、初七日や一周忌を認識

キーワード：中世日本、時間学、時刻制度、時間意識
Key words ：medieval Japan, time studies, time system, time awareness

している風はない。彼ら彼女らにとっては「今」がすべてである。ゆえに、時間について考察することは、「人間」学部の一員として、最も根源的な問いといえるかもしれない。

２．シンポジウムの報告

このシンポジウムは「中世日本の時間意識」と題した。European Research CouncilのAdvanced Grant Project“Time in Medieval Japan”として、2017年から2022年まで５か年度にわたるプロジェクトの一部である。スイス・チューリッヒ大学（以下、チュ大）を拠点とし、同大のSTEINECK C. Raji教授を研究代表とする。日本では山口大学に時間学研究所があり、チュ大および同研究所が主催、日本時間学会が共催となって開催された[3)]。

主日程に先立って、７月30･31両日には「時間学ワークショップ2018―方法論の可能性―」が開かれた。30日が研究方法論に関するワークショップ、31日が真木悠介『時間の比較社会学』（岩波現代文庫、2003年）の輪読会という内容で、院生による交流会であった。したがって筆者らは参加しなかったので、これについてはコメントしない。ただし日本側、山口大の院生４名が悉く中国からの留学生であった点、やや落胆を感じた。日本人は佛教大の院生１名のみで、今さらのごとく、日本の大学がプラグマティズムに悪く毒されている実態を突き付けられる想いであった。

シンポジウムは７つのセッションに分けて行なわれた。曰く、暦（１）、兵学（２）、朝廷と武家（３）、村落（１）、宗教（６）、身体（２）、市場（３）である。もっとも、これは内容的な区切りだけで、実際には１室で逐次進行したので、すべての発表を漏れなく聴講した。括弧内はそれぞれの発表本数で、セッションごとにコメンテータによるコメントと質疑応答とが行なわれ、最後に３人のコメンテータにより３日間の総括がなされた。以下、個々の発表を概観する。なお、論題は当日配付のレジュメに従う。

①「暦」セッション

コメンテータ：Hintereder-Emde Franz（山口大）

発表１：細井 浩志（活水女子大）「日本中世の暦と時間研究」

暦あるいは暦注の研究史を丹念に概括したうえで、時間意識の地理的な収斂ないしは分散のありようを明らかにするためには、地域差の見られる暦注に着目することが重要かつ有効であることを提示した。わけても、安倍晴明に仮託される『簠簋（ホキ）内伝』の分析を基盤とする点、説得力に富むものであった。また、平安時代には仮名暦が登場し、室町時代には木版暦が販売されるようになるという事実を踏まえ、暦が普及する背景にある時間意識の変化に注目すべきことを指摘した。

②「兵学」セッション

コメンテータ：Hintereder-Emde Franz

発表１：BUHRMAN Kristina（米・フロリダ州立大）「中世日本における軍事的選日に関する一考察―史料概要と中世前期の例―」

吉凶を指示するさまざまな暦注に拘泥することは、時代的には古代的、社会的には朝廷的と見なされがちであったが、実際には中世武家社会においても、出陣や合戦の軍事行動に際してそれらが盛んに参照・採用されていたことを示した。とくに、鎌倉幕府（おもに実朝期以降）に陰陽師が仕えていたことや、

戦国大名がしばしば造暦職人を統制しようとした事例などに着目し、緻密な史料調査に立脚する発表であった。

発表２：上野 太祐（神田外語大）「中世兵法の時間試論―南北朝前後を中心に―」

中世の戦乱に焦点を当てたとき、二つの時間が想定されるという。一つは、生死の最前線で経験される生々しい時間であり、いま一つは、戦闘を振り返って語られる物語としての時間である。時間論という位相において、中世兵学や軍記物語がこの二つの時間を仲立ちすると考えられるのではないか？との問題意識に基づく発表。最終的に目指すところは、戦乱の時代における時間観の解明ということで、その端緒となる内容であった。

セッション①②へのコメントは併合して行なわれたが、全体として、暦と時間、兵学・軍事と時間という問題系の意義を包括的に浮き彫りにするコメントがなされた。そして、こうした領域の分析をより深化させるためのさまざまな個別的視点が提起された。

③「朝廷と武家」セッション

コメンテータ：小山 恵美（京都工芸繊維大）

発表１：森野 正弘（山口大）「ほととぎす（郭公／時鳥）の初音に投影される宮廷女性の時間意識」

まず前提として、中世宮廷女性のテクストに見る価値観が『古今集』によってコード化されていたことを示したうえで、本来は移りゆく自然現象の一つに過ぎないほととぎすの初音が、季節的時間をかたどる１コマとして再配置されてゆく過程を検証した。またその中で、地域的な違い（王権の版図の内外）という地理的要素が、テクスト内世界の時間性に大きく影響していることも示された。無論、ほととぎすの初音は一つの事例であって、他にも種々の事物が同様の検証の対象となる、その一端を採りあげたものである。

発表２：MÜLLER Simone（チュ大）「後醍醐天皇の内裏における一日―時刻制度の検討を中心に―」

後醍醐天皇の『日中行事』と東山御文庫本『日中行事』（平安時代）とを比較しながら、その内容・構造の違いを明らかにし、とくにクロノポリシー（時間の使用法の調整と規制）に焦点を当てて論じた。そして、時間のみならず空間との関連において、日常行動がどのように調整、構成されていたのかを分析した。すなわち、「時計仕掛け」とも形容される中世宮廷が、濃厚かつ優美な時空のメカニズムとして作動していたさまが精密に示された。

発表３：CIORCIARO Alexandra（チュ大）「鎌倉幕府の公務史料における時間」

鎌倉幕府の公務記録の例として問注所執事太田（三善）康有による『建治三年記』に注目し、時間表記の様式を分析した。比較対象として採りあげたのは『武家年代記』で、これには公武双方の記事が併存する。測度的（metric）、措定的（thetic）、類型的（typic）の各面がどう序列化され、どのような文脈で使用されるのかを分析したもので、基本的なことであるにもかかわらず等閑視されてきた点に目を向けた好発表であった。

このセッションのコメンテータは、感性情報学や環境生理学という、やや馴染みの薄い領域の研究者だが、それだけに刺激的なコメ

ントが提示され、それを受けて活発な質疑応答が行なわれた。諸分野の研究者による学際的な意見交換（陳腐な物言いながら…）に、あらためて魅力を感じさせられるセッションであった。ちなみに、発表１に関連して、非公式にではあったが､そもそも「ほととぎす」がカッコウなのかホトトギスなのか、真剣な話題に上ったことも楽しい思い出となった。

④「村落」セッション

コメンテータ：辻 正二（保健医療経営大）

発表１：右田 裕規（山口大）「前近代の農業従事者の夜間労働」

中世・近世の村びとたちの労働行程においても、夜間労働は質・量ともに重要なものであった。とりわけ、それは若者、女性、奉公人に顕著であり、その点は近代以降、また現代人と同様と見えるのだが、そこにはどのような違いが見られるのかということを、歴史社会学的に検討した。さらに、夜間労働従事者のもつ境界的属性に着目した点も興味深いものであった。その意味では、民俗学的な要素も含まれていた。

コメンテータからは、日本のムラ社会のもつ普遍的・固定的性格を射程に入れる必要のあることなどが指摘された。

⑤「宗教」セッション

コメンテータ：坂東 洋介（皇學館大）

発表１：湯浅 吉美（筆者）「鎌倉時代の寺院における時間意識」

『鎌倉遺文』に収録された約３万５千通の文書（鎌倉時代の文書の大半といえる）から、時刻および時間の表記を集めて、定量的に把捉・分析した。１日を12分する十二辰刻は800通弱に見られるものの、それ以下に細分する時刻・時間表記は意外なほど少数であることを示した。また同時に、神社（伊勢）と寺院とで、あるいは宗派により、細分する時制が異なる可能性を示唆し、かねてより時刻制度の複数性（plurality）・多様性を予見していたチュ大の面々から（自賛で恐縮だが）大いに歓迎された。

発表２：頼住 光子（東京大）「道元の時間論」

『正法眼蔵』有時巻･行持巻の解読を通して、道元の主張する存在と時間との不可分性が、どこまでも他存在との相互依存を前提としたテーゼであること、また「修行と成道」を媒介として感得される特権的な時間が､可逆的･非連続的・モナド的なものであることなどを論じた。そしてそれらを､「無我」概念に基づく汎仏教的存在論に立脚した時間概念であることを明らかにした。

発表３：STEINECK C. Raji（チュ大）「道元の著作にみる時間の表記と時間の思想」

発表２と同じく『正法眼蔵』有時巻を題材として、道元の時間論を主としながら、中世日本の宗教世界固有の時間性を論じた。すなわち、道元のいう「永遠の今」が、分節化された時間を前提として成り立っていること、修行期間の量的記述が仏祖の時間記述と密接に結びついていることなどを指摘し、宗教的時間「而今」と世俗的時間「十二時」とが道元においてどう関連しあっているのかを論じた。道元第二の主著ともいうべき『永平広録』にも言及するところがあった。

発表４：STAEHELIN A. F. Etienne（チュ大）「鎌倉初期曹洞宗における時間概念」

やはり道元の時間論として「有時」を検討する内容だが、この発表ではとくに道元の弟子たちの遺した著述を題材としたところに独自性があった。具体的には、道元の弟子の詮慧『御聞書抄』、さらにその弟子の経豪『正法眼蔵抄』などを採りあげ、そこに見られる解釈を論じた。それぞれ「有時」を独自に解釈しており、道元の時間概念とはかなり異なっていることを示す一方で、瞬間と時間全体との統一性を強く主張するところに共通点を見出す。こうした変化・変更の背景には、中世日本独特の思想的展開ともいわれる天台本覚思想があるとの指摘が斬新であった。

発表５：真木 隆行（山口大）「平安時代末期における上皇出家の質的変容」

通過儀礼としての出家に関して、その質的変化を考察した発表で、とくに保延７年（1141）３月に39歳で出家した鳥羽上皇に主眼をおいたもの。とりわけ、院政期の上皇は、出家した後にも（あるいは、出家後に一層）実権を保持したことに焦点を定め、上皇出家の時系列的変化を追跡した。発表者はそれを「死の先駆的自覚を伴いながら過ごした晩年のありよう」と言っている。そして、鳥羽院出家の歴史的意義（以後の上皇出家の先例となった）を明らかにしたものである。

発表６：星 優也（佛教大）「中世神話と時間意識―土公神の祭文と神楽をめぐって―」

中世は「第二の神話の時代」といわれ、古代とは異なる独自の神話が形成される時代であるという。その際、中世の神話叙述は、古代神話にはなかった起源を語りだす。その一つが、季節や暦など「時間」に関する起源である。この発表では、五郎王子譚として知られる土公神（陰陽道で祀られる神の一つ）祭文を中世神話として位置付けたうえで、暦と季節の運行とをめぐる神話と身体儀礼とが成立（あるいは再成立）してくる過程が丹念に跡づけられた。

６本もの多角的な発表の後なので、コメンテータはなかなかに苦心している様子であったけれども、すべての発表の相互関連を的確にまとめるコメントがなされた。とくに発表２～４の３本は互いに密接に関連するものゆえ、個々の研究が補完しあって一つの世界を構築してゆくさまが見られ、門外漢の心をも浮き立たせるものであった。このことは元来、このシンポジウム自体がそういう性格をもつのであるが。

⑥「身体」セッション

コメンテータ：ANDREEVA Anna（独・ハイデルベルク大）

発表１：TAN（陳）Daniela（チュ大）「『頓医抄』の婦人部における身体と時間」

中世医学書の一つ、梶原性全の『頓医抄』第27章「月水論」を題材として、女性の月経に関する記述に見られる時間表記・時間意識を検討した。比較のため、日本最大の医書『医心方』、また『頓医抄』とほぼ同時期の成立と見られる『万安方』をも参照している。女性の身体的時間が、自然、とりわけ天体の運行、と類推的に結び付けられ、循環的・円環的に表象されていた様子が報告された。

発表２：斎藤 菜穂子（國學院大）「中世女性

の月経と時間意識―『うたたね』及び『とはずがたり』の考察から―」

13世紀半ばの『うたたね』と14世紀初頭の『とはずがたり』とを採りあげ、10世紀後半の『蜻蛉日記』と比較することにより、中世女性の月経に関わる時間意識の特徴を、平安女性のそれとの対比において見出そうとしたもの。結果、中世においては、とくに懐妊時に月経が意識に上り、さらには秘密の妊娠に気づく契機としても取りあげられることを示したうえで、個的な虚構の時間や、(公的な時間とは別の）私的な時間が、自覚的・意図的に創出されていることを示した。それらはまた、個的主体やジェンダー的共感の確立・喪失との視点からも検討された。

コメンテータからは、従来の「穢れ」概念一辺倒の解釈とは異なる見方の呈示が新機軸であること、および、女性史の枠組みを超えた、普遍的・人類学的な展開の可能性が提起された。質疑応答で出た、男性も（お相手の）女性の月経について知悉していたはずだという話は、実に盲点を突くものであった。「兼家は絶対、手帳につけていたと思う」との某氏の発言に、一座大爆笑しつつも感心、首肯した[4)]。

⑦「市場」セッション

コメンテータ：KOCH Angelika（ベルギー・ゲント大）

発表１：桜井 英治（東京大）「中世日本における労働時間と賃金」

中世日本においては、モノの価格は現代と同じように需給バランスによって決定されたにもかかわらず、労働力やサービスの対価はそうではなかった。言うまでもなく、夏と冬とでは昼夜の長さが違うが、中世の賃金は年間を通じて一定とされた。さらに言えば、時間給という発想はなかったのであるが、実は古代日本にはそれがあった。こうした変化の帰結としての、中世固有の思考様式（時間単位の労賃給付や労働力価値の見積もりという思考・意思の存否）、およびその史的意義を論じた発表。

発表２：片岡 耕平（チュ大）「徳政と時の戻り」

徳政（売買・貸借契約を破棄させる政治的営為）は、中世史研究の興味深い題材の一つだが、古代のそれとの関連性についてはいまだ十分に明らかとなってはいない。この発表はその点に関する新しい視点として、徳政をクロノポリシー（時間にまつわる施策）の一種として捉えることを提案したもの。徳政を時間論的に読み替えると、理想的または想像的な過去の再現と解釈できることを示した。つまり、徳政の本質は時間を戻すことにある、と論じたのである。

発表３：AMMANN Vroni（チュ大）「中世日本における香の流通・消費と時間」

鎌倉末期に成立した『後伏見院宸翰薫物方』を題材として、香材の生産・流通・消費を時間との関連において検証した。香は季節性に立脚するがゆえに、必然的に円環的な時間概念との関係が深い。その一方で、香材は安定して長期的に保存することができるから、線形的な時間概念ともつながりをもつ。そして何よりも、香は時計としても用いられた。これらのことを念頭において、薫物（たきもの）に関する史料の中から時間表記を集めて定量的に検討した発表。

コメントとしては、①業種による賃金体系の差異の有無、②徳政における時間政策の具体的側面、③香材と時間との結び付きに関する質問など、詳細な検討が加えられた。

⑧総括

コメンテータ：佐藤 弘夫（東北大）、坂東 洋介、辻 正二

佐藤からは、一元化・線形化された近代的時間とは異なる、地域・集団・階層ごとに枝分かれした中世日本社会における時間の多様性を、巨視的な社会構造と関連付けながら考察する必要があろうと、今後の指針が提示された。

また坂東からは、原始的な社会が含んでいた時間の多様性が、古代国家によって一元的に収斂されたと見ると、中世の時間の多様性をば、それに対する反発作用の帰結として捉えられるのではないか、という問題提起があった。

最後に辻は、すべての報告を社会学的な視点から再定位するコメントを述べた。

3．むすびに

以上のように、実にさまざまな関心や興味に突き動かされて、時間をめぐる研究がなされている。しかしながら、日本ではまだ、こうした研究領域が十分に認知されてはいないように思う。日本時間学会は厳然としてあるものの、「私の専門は時間学だ」と明言する日本人研究者には会ったことがない。このことは実はあまり不思議でもない。筆者は日本古文書学会の会員となって久しいけれども、奇妙なことに、会員名簿の「専攻・専門分野」欄に「古文書学」と書いている人はほとんどいない[5]。古文書学会の名簿にわざわざ「古文書学」と書く必要はないという道理もあるが、おそらく要は、基礎研究的なものは「本職」として名乗りにくいということではなかろうか。かく申す筆者も、今回は招かれて発表したものの、時間学をやっているという意識はない。実利効用ばかりが注視される今、学問の在り方とか、学問を取り巻く環境（大学の中も含めて）などが、根本から見直されねばならぬのであろう。

何はともあれ寒心させられたのは、Steineck氏（日本学主任教授）はもとより、院生全員に至るまで、チュ大の面々が実に自在に日本語を操ったことである。会話は申すに及ばず、日本人もよう読まぬような道元禅師の原典（むろん漢文）を扱っている。「発表は日本語で」といわれて請け負った筆者だが、挨拶や休憩時間中は英語だろう、下手をするとドイツ語では？と、内心ビクビク出かけたところ、正真正銘まったくの杞憂に終わった。最後のフェアウェル・パーティーで山口大の役職者某氏の曰く、「最初から最後まで完全に日本語だけという「国際」シンポジウムは珍しい」と（笑）。チュ大、畏るべし[6]。

もう少し時間学の全体像について語るべきであったと思うが、紙幅も尽きたことゆえ、これにて筆を擱く。

注

1）実際、あるネット書店を「時間論」で検索すると、補助的なキーワードとして「時間論（哲学）」と「時間論（物理学）」とが表示される。哲学と物理学以外によく見られるものとしては、計時装置（要するに時計）の技術的発展の跡をたどる、ということがある。あくまでも「時計の歴史」なのだが、それを修辞的に「時間の歴史」と称えることがしばしば行なわれる。

2）たとえば、かつて食物を見つけた場所にまた行ってみる、というようなレベルでならば、過去を認識していることは十分に考えられる。しかし、測度的に「３日前にここで」などと思考してはおるまい。あるいは、直前の食事から何時間経過したから次のエサを、というわけでもない。もっぱら文字どおりの腹時計に従っている。それに対してヒトは、腹具合の如何にかかわらず、時計を見て食餌行動に走ることが多い。時計が退社・退庁時刻を指すと、決まって急にそわそわしだす呑兵衛を見よ。かなりの呑み助といえども大抵は、わずか１分前には酒のサの字も想ってはいないものである。

3）山口大学時間学研究所は、かの高名の数学者、広中平祐学長の時代、2000年４月に設立された。世界的にも珍しい研究所だが、地方のいわゆる旧二期校大学をして国際的な学術中心たらしめるという理念は、着実に成果を挙げているといえよう。構成は、数理科学、宇宙地球科学、生命科学、心理学、人文学、工学、社会科学の７部門に分かれ、７名の専任所員のほか、学内兼担15名、客員14名を擁する。さすが国立、羨ましい限りである。

4）藤原兼家は『蜻蛉日記』の作者の夫。同日記は、一夫多妻の貴族社会にあって、ままならぬ結婚生活の苦悩を回想した作品である。

5）念のため贅言。いわゆる個人情報保護法のせいであろう、だいぶ前から会員名簿は会員に配付されていない。何かと厄介なことである。

6）ちなみに、彼ら彼女らの日本語に、訛りはほとんどない。ついでに申せば、来日は初めてという数人も含めて、全員が自然に箸を使った。学究的関心にとどまらない、異文化理解の深さ・厚さをそこに見なければなるまい。